

中日評論

とまで流出が
つづへのたつつか
と、世界の耳目を
驚動しようとする
させたインドシナ
難民は、ようやく
温潮の兆しを見せ

はしめた。ジュネーブの国連難
民高等弁務官事務所発表に
よると、七月中のインドシナ難
民は、万七千三百二十五人で、
五月と六月の約半分になったと
いう。しかし、ベトナム南部だ
けでも、また百万とも百二十万
とも推定されるインドシナ難民
がかくも大量に流出する根本原
因が除去されたわけではないの
で、これは当面の小規模である
るのかもしれない。またまた憂観
は許されぬ。

ベトナム、カンボジア、ラオ
スのインドシナ三国は、民族の
「解放」を成し遂げたいはずであ
るのに、すでに六千万以上の
難民が、それも大部分は命かけ
の「ボート・ピープル」として
流出するという現実を接し、は
やくも昨秋、オーストラリア北
部のダーウィンまで小さなジャ
ンクでたどりついたベトナム難
民の状況をつづきに自撃した体
験をもつ私としては、いまさら
ながらに「解放」と「革命」
のはざまに生ずる矛盾の悲劇
性を考へてはまずにはいられな
い。

すでに難民問題をめぐる異例
の国連会議も七月下旬に開か
れ、周辺のアセアン諸国はベ
トナムにたいし「二国控(もとむ
心)を締めるよう厳重に抗議し
たし、中国の韓念賢外務次官は
七月初旬の中越次官級会談で難
民を流出させているベトナム政
府の立場を「ヒトラーのユダヤ
人迫害に匹敵する残虐行為だ
と激しく非難していた。

漢民族の漂流の歴史

アジアに於ける難民の源流

中嶋 嶺雄



る華僑は、いまや悪化しきつて
いる中越關係に照らしても、い
つ北京の「第五列」になるかも
しれない。穀つぶし以外のな
にもでもないのである。漂流
難民を洋上に押し返しているマ
レーシアにしても、全人口の四
〇%に近い華人の存在がこの国
の国民形成にとっても大きな摩
擦(まさつ)要因であり、一九
六九年の五・三〇事件に見られ
るように、しばしば人種暴動に
さえ発展してきただけに、もう
一人の華人の流入といえども我
らに合致するものではないであ
る。

先の国連難民会議で二万人收容
の用意を表明はしたが、去る
六月、イギリス船が黄埔に運ん
だ四十人のベトナム難民の受け
入れを拒否し、この船はやむな
し難民を運んだのであつた。
香港へも、こうして難民が押
し寄せ、あの小さな土地に五百
万もの人間があふれている。と
ころが、驚くなれば、その香
港へは、このころ、インドシナ
難民以外にも中国大陸からの入
境者が急激に増大しているの
である。

優がならなくなってしまうとい
る。善意に解釈すれば、彼らと
て、喉(のど)も張りさげんば
かりの気持で難民船を押し返
しているのである。

それでは、これらの難民を中
国がすべて受け入れたらどう
か。歴史的面で見ても、華僑は中
国大陸から流出したのであるか
ら、中国がすべて受け入れれば
よいのではないか。だが実際、
これらの難民は「祖国」中国
大陸へ戻ることは決して希望し
ないのである。それに中国は、
年間で膨れ上がるかもしれない

いと戦々々々である。こうし
て、香港への難民問題がかつて
の一九六二年の難民潮に次いで
新たに重大な問題になりつつあ
ることについては、インドシナ
難民問題の発生、それを非難す
る中国の強い姿勢の陰にかく
れてまたあまり知られていな
い。

や郷土にたいする愛着が根強
い半面、ひとたびそこが住めな
くなったと見做(みな)ぶと、ま
さに天降(てんびん)棒(ぼう)一本を
かついで新天地へと流出し、そ
こでたちまちにして集団的か
つ排他的に生活の基盤を確立
し、富を形成してしまつた天稟
(てんびん)の能力をもつてい
る。

分が英中国人華僑であるこ
とであり、ここに今日の難民間
題のカギがあるのである。つま
り、ベトナム難民といひ「ボ
ート・ピープル」といひが、そ
れらはいずれも中国人の大量流
出なのであって、いまさらなが
らに東南アジアにおける「中国
の影」の位置感を痛感させるを
得ない。それに行き、ベトナム側
からすれば、すでに彼らがあか
らさまに語っているように、新
大陸へ戻ることは決して希望し
ないのである。それに中国は、
年間で膨れ上がるかもしれない

ある。香港政府による五
月だけで不法入境者(つまり大
陸からの難民)が二万四千人、
これに合法的入境者が四千人、
二月から六月までの半年間
に合計二十万人に近い大陸から
の入境者があったのである。香
港の左派系紙は、この現象を中
国の一開放政策と関連させて
いるが、この調子だと中国の政
策的変化のおかげで来年中(こ
れ)に香港の人口は五千万人も
増え、総人口の約一〇%が一
つに「華僑あり」の繁(さか)ん
たところ、中国人は、祖国

強制的に送り返したのであつ
た。しかし、その後も命からが
ら海を泳いで香港へ脱出して
くる難民は、今日に至るまで後を
断たなかつたのである。

このように見てくると、今日
のアジアの難民問題はすべて
の「東方のジュネーブ(ユダヤ人)」、
東洋のシネー(ユダヤ人)の
存在など、いわば華僑のルーツ
としての漢民族における流民、
棄民、流散の歴史の流(なが)れ
に構(かま)えたるものがあるとい
はならないのである。

前世紀中葉のアンヘン戦争から
大平天国時代の動乱期には、た
んに東南アジアのみならず、欧
米の奴隸解放の直後であつたこ
と、アメリカやオーストラリア
がゴールド・ラッシュの時代で
あつたことなどが重なつて大量
の「吉力(クーリー)」が中国
大陸から全世界に流出した(隣
国のがが国に流入しなかつたの
は、日本が例外的に江戸時代初
期以来、中国人労働者の入国を
禁じてきたからである)。さら
にこのごろと王朝末期の動乱
二つの大量の棄民たち、そして
四世紀末の永嘉の乱や九世紀の
黄巢の乱以来、中原の地から華
南へ、そして華南から南洋社会
へと移動した客家(ハッカ)の
存在など、いわば華僑のルーツ
としての漢民族における流民、
棄民、流散の歴史の流(なが)れ
に構(かま)えたるものがあるとい
はならないのである。

源

8.13

(東京外語大教授)